産大法学　48巻1・2号（2015.1）

資　　料

エルンスト・ユンガーとナチズム（2）

川　合　全　弘

前稿[1]に引き続き、本稿では、エルンスト・ユンガーとナチズムとの関係を考察するための資料として、ナチズムについて論じたユンガーの論文の邦訳を試みる。前回訳出した論文「ナショナリズムとナチズム」（1927年3月）へのまえがきにおいて、訳者は、同論文の背景に、同年前月におけるユンガーとゲッベルスとの初めての出会いとそれがもたらした双方の幻滅という事実があったのではないか、という推測を述べた。組織家、宣伝家としてのゲッベルスの型通りの言動は、革命的勢力としてのナチズムに期待をかけるユンガーにいったん幻滅をもたらしたものの、ユンガーをナチズムとの決別へと駆り立てるまでにはなお至らなかった。同論文でユンガーが提言したのは、要するに、ユンガー流のナショナリズムとナチズムとの実質的相違の確認と両者の役割分担の構想である。それによれば、ナショナリズムは「精神的な運動」として革命の「理念をできるかぎり深く純粋に把握」することを目指すべきであり、ナチズムは「政治的組織」としてこの革命理念の実現のために「実際的な権力手段の獲得」に努めるべきであった。この構想は、ユンガーが異質さを感じ取らざるをえなかったナチズムを、辛うじて ――「精神的な運動」と区別され、それを、その組織力を通じて権力政治的次元で支える ―― 同盟者として認めようとする、一時的な妥協の産物であった。

今回訳出する論文（以下、本論文と呼ぶ）は、ユンガーが上記論文の2年半後に著したものであり、ナチズムをもはや革命的勢力と認めず、むしろ市民的勢力と断じることによって、ナチズムとの決別を告げた、ユンガー＝ナチズム交渉史に画期を印す論文である。本論文の題名「『ナショ

ナリズム』とナショナリズム」には、当時一般にナショナリスト陣営の代表的存在と目されていたナチズムや国家人民党の主張を、似非ナショナリズムにすぎないと見る、ユンガーの判断が端的に表明されている。

本論文の事実的背景を成すのは、冒頭で「ここ数箇月来の出来事」と述べられ、文中で名指しされる農民運動「ラントフォルク」の尖鋭化、及びその関係者による一連の爆弾テロ事件である。1928 年 11 月にシュレスヴィッヒ＝ホルシュタイン地方の窮乏化した農民によって始められた政府への陳情運動は、税金滞納による牛馬の差し押さえや抵抗する農民の逮捕と有罪判決などを契機として、次第に反体制的な色彩を濃くするとともに、ドイツの各地、とりわけハノーバー、オルデンブルク、東プロイセン、シュレージエンへと飛び火した[(2)]。ユンガーとその周辺 —— アルミン・モーラーの分類に倣って言うならば、国民革命派 —— は、この急進化した農民運動の中に、市民的体制の中に取り込まれない、アナーキスティックな変革のエネルギーを見出し、それに加担した。モーラーによれば、政府建造物に対して仕掛けられた一連の爆弾テロ事件は、殺傷を目的とするものでなく、むしろ農民運動の反市民性、反体制性を「象徴的に」示威する暴力行為として、この派によって計画されたものであった[(3)]。この爆弾テロ事件の犯人として、ブルーノ・フォン・ザーロモンとエルンスト・フォン・ザーロモンの兄弟、及び文中に登場する「シル義勇軍」のリーダーたるヴェルナー・ラスとハンス-ゲルト・テヒョウが逮捕されている[(4)]。いずれもユンガー周辺の人物であり、ベルクゲッツによると、ユンガーはブルーノ・フォン・ザーロモンに関する裁判で証人として出廷し、彼のアリバイを証言している[(5)]。

他方、ナチ党は、党組織を防衛するために、急進化する農民運動と爆弾テロ事件とに速やかに距離を置いたばかりか、本論文中で触れられているように爆弾テロ犯の逮捕に懸賞金を付けてこれを敵視しさえする態度を示した。ユンガーが本論文においてナチズムを体制に安住する市民的勢力と断じた直接のきっかけは、ラントフォルク運動と爆弾テロ事件とに対するナチ党の —— ユンガーの目には「市民的」と映じた —— この組織防衛

的態度であった。ユンガーのこのようなナチズム評価の当否は、ここで問わない[6]。ここでは事実関係の確認のために、さしあたり本論文に対するナチ党側からの反応とそれに対するユンガーの再批判とだけを見ておこう。

ナチ党側からの主な反応は二つある。一つは1929年10月10日付けでユンガーに宛てられた総統個人秘書ルードルフ・ヘスの手紙である[7]。ヘスの手紙は、「ナチ党が、『爆弾テロ』に従事せずとも、ライヒ全体において、またあらゆる階層において信条の変革を呼び起こしうるがゆえに、〔国家当局によって〕ますます本物の危険と見なされつつある」こと、当局が爆弾テロ事件をナチ党と結びつけることによってナチ党を弾圧する機会を窺っていたこと、しかし「我々の予防的な措置のおかげでその思惑が外れた」ことなどを指摘することによって、ナチ党の革命的性格を強調しつつ、爆弾テロ事件に際するナチ党の組織防衛的態度を弁明しようとするものであった。ここには、ユンガーの非難に応えつつ、ユンガーとの関係を維持しようとする宥和的な態度が見て取れる。いま一つは、党宣伝部長ヨーゼフ・ゲッベルスによる、より攻撃的な反応である。ゲッベルスは、自らが編集する『攻撃』紙（1929年10月27日付）において、特に、ユンガーがよりによって『日記』というユダヤ系の雑誌に本論文を寄せ、ナショナリズムにとっての反ユダヤ主義の意義を否定したこと、ヒトラーを名指しで非難したことを取り上げ、次のようにユンガーを罵倒した。「エルンスト・ユンガーは、かつては優れた戦争書を書いたものだが、いまや自らの文学的野心に駆られてユダヤ＝資本主義的な『日記』誌に『ナショナリズム』に関する論文を書き、おまけにその中で、自らの新しいご立派な取り巻き連中の気に入られようとして、ナチズム運動に野卑な言葉を吐きさえした。……我々は、ユダヤ人売国奴の赤新聞で我々に野卑な言葉を吐く転向者とは議論しない。しかしユンガー氏は、これで我々にとっては用済みである[8]。」ゲッベルスのこの文章は、ユンガーとの最終的な絶縁を告げるもののように見え、ひょっとしたらゲッベルス本人はそれを意図したのかもしれない[9]。しかし実際には、ユンガーに対するナチ党からの勧誘の働きかけは、ゲッベルスによるものも含め、これ以後も断続的に行われた[10]。

ユンガーは、本論文とそれに対するナチ党からの反応とに直接関連して、さらに1929年10月と1930年1月に2篇の論文を著している。[11] ナチズムの評価に関する限り、いずれの内容も本論文と同趣旨である。1919年12月から1933年9月までの間におけるユンガーの政治評論を編纂したベルクゲッツによると、本論文とそれに関連したこれら2篇と以降、ユンガーの政治評論にはナチズムへの直接的言及はもはや見られない。[12] 本論文は、ユンガーにとって、革命勢力としてのナチズムに見切りをつける決定的な転機となった、と言えよう。

なお、原文でイタリック表記の箇所は、訳文ではゴシック体で表記した。

注

（1） 拙稿「エルンスト・ユンガーとナチズム（1）」、『産大法学』47巻3・4号、430～437頁。

（2） Vgl., Armin Mohler, *Die Konservative Revolution in Deutschland 1918-1932. Grundriß ihrer Weltanschauungen,* 1950, Friedrich Vorwerk Verlag. S. 199.

（3） Vgl., *ibid.,* SS. 200ff. なお次の論文は、当時のナショナリスト陣営におけるユンガーと国民革命派の党派的位置を巧みに分析して興味深い。平野和男「エルンスト・ユンガーとナチズム」（上）、（中）、（下）、立命館大学人文学会『ミネルヴァの梟』、第1号、10～46頁、第2号、4～37頁、第3号、12～43頁。平野氏は、「ナショナリスト時代のユンガーとは『何者』なのか」と問い（第1号、19頁）、「国民革命派の思想家としてのユンガーとは、……エアハルト旅団系の組織の準構成員的なイデオローグではなかったのか」という結論を導き出す（第3号、39頁）。

（4） Vgl., Ernst Jünger, Vorschusslorbeeren der Polizei, *Deutsche Zeitung*, 15. Sept. 1929, in: Ernst Jünger, *Politische Publizistik 1919 bis 1933,* herausgegeben, kommentiert und einem Nachwort von Sven Olaf Berggötz, Klett-Cotta, 2001, SS. 499-501.

（5） Vgl., *ibid.,* S. 785.

（6） ユンガーは1929年9月10日付けでブルーノ・フォン・ザーロモンに宛てた手紙において、爆弾テロ事件がナチズムの「隠された市民的核心」を暴露したとして、次のように語っている。「これ〔ラントフォルク運動〕は、私が実際に関与する初めての実践的運動です。……この活動〔爆弾テロ〕がナチ党員を、あるいは少なくともその指導者たちをして、彼らの隠された市民

的核心を曝け出させたことを、私は肯定的な出来事として歓迎しています。……それ〔ラントフォルク運動〕は大規模な政治的変化をもたらすためには、もちろん小さすぎますが、……しかしそれは、素朴な考えの人びとにさえ、我々が生活している不均衡状態を全く明白に認識できるようにする、一種の照明の役割を果たします。行動には、立場決定を強いるという利点があるのです。……我々の意味におけるナショナリズムを極右派から区別する対立点がすでに明瞭となったことは、非常に良いことです。極右派が、間違いなく一旦は権力の座に就くでしょう。そのときに初めて、つまりヒトラー、ゼルテ、フーゲンベルクが勝利するときに初めて、我々の戦線がその本当の意義を獲得することになります。彼らの勝利は、単に西側派外交と市民的国民的内政との継続を意味するにすぎません。」次からの重引である。Sven Olaf Berggötz, Ernst Jünger und die Politik, in : Jünger, *Politische Publizistik,* S. 859.

ナチズムをフーゲンベルクらと同類の「市民的」勢力と目し、その政治を「西側派外交と市民的国民的内政との継続」と見るユンガーのこのような判断が、20 世紀全体主義の代表的勢力たるナチズムに対する全くの過小評価であったことは、言うまでもない。ユンガー自身、後年の日記の中で、ナチズムに関する当時の判断の誤りについて幾度か回想している。例えば、1946 年 3 月 31 日のくだりにはこうある。「私は間違いなくこの男〔ヒトラー〕の才能を過小評価していた。一切を解き放ち、動態化する彼の力、大衆と機械の時代の傾向を把握し、それを単純な公式へともたらす彼の勘は、彼の出自を考慮した場合は特に、途方もないものと言うべきであった。……〔ヒトラーに対する〕伝統主義的、審美的、道徳的な疑念が、さらには単なる知性もが、それを容易に過小評価させた。」Ernst Jünger, *Sämtliche Werke, Bd. 3,* Klett-Cotta, 1979, S. 613.

ヒトラーとナチズムとに対するこのような過小評価は、ユンガーの政治的盟友エルンスト・ニーキッシュにも共通する。ニーキッシュが 1932 年に著したヒトラー批判のパンフレット『ヒトラー ―― ドイツの不運』は、ナチズム評価に関してユンガーと同様の見解が見られる。ニーキッシュは、例えば次のように述べている。「ボルシェビズムは因習としての西洋に対する革命である。ボルシェビズム・ロシアは変革をもたらす力の場であり、それを前にすれば、ヴェルサイユ秩序は為す術もなく頽れてしまう。……ヒトラーは全ての西洋列強と一緒になってソ連と対立する戦線に立つ。現在の世界情勢を顧みるならば、問題となりうるのは、**ヴェルサイユ**秩序かそれとも**ボルシェビズム**秩序かの二者択一だけである。一方を擁護する者は、それだけで他方の敵となる。西洋の精神的諸価値、文明遺産に固執する者は、ヴェルサイユに属する。彼は、これらの価値と遺産を危険に晒さないために、ドイツ

を犠牲にする。彼は、たとえ西洋とドイツ・ナショナリズムとを『より高い統一』へともたらす『保守的総合』を自慢するにせよ、結局のところ投降者にすぎない。ヒトラーの地盤は西洋である。彼の外交政策はヴェルサイユの受益国家群に援助を求める。彼はヴェルサイユ圏の外には出ない。ヴェルサイユの**彼方に**彼の立場はない。彼の外交政策の意味は、一方の仏と他方の英伊との間に存在する親族対立からドイツにとっての若干の小さな利益を引き出すことにある。**彼の外交政策は国政的戦略ではなく、家族内陰謀にすぎない。**ヒトラーは、せいぜい親類をいらいらさせるだけの、単なる西洋的不平家にすぎず、けっして世界状況を変革する革命家ではない。」Ernst Niekisch, *Hitler. Ein deutsches Verhängnis,* Reprint 1990, Verlag Siegfried Bublies, S. 16.

ユンガーとその周辺におけるナチズムの過小評価について、訳者はその原因の一端を彼らのイデオロギー的急進性それ自体の中に求めうると考えている。彼らのイデオロギーの知的に洗練された急進性が、ナチズムのイデオロギーの知的凡庸さという、あえて言えば審美的な問題を不必要に際立たせてしまうことによって、そのイデオロギーが本当に大衆の心を捉えたときにいかなる現実をもたらすことになるか、という本来の政治的問題に対する彼らの眼を曇らせてしまったのではなかろうか。しかも知的急進性と知的凡庸さとのこの対照は、20 年代後半のベルリン社交界におけるナチ党幹部との実際の交際を通じて、ユンガーらによって人物の器量の差としても実感され、そのことがこの対照の政治的意義を彼らに過大評価させることにもつながったように思われる。往時の交際を回顧したユンガーの日記には、エルンスト・ニーキッシュやヴァレリュー・マルクのような彼の友人と対面した際のゲッベルスの器量の小ささについて、強調ないし誇示の響きを伴う記述が散見する。たとえば、1945 年 5 月 7 日付や同月 10 日付のくだりを参照されたい。Vgl., Ernst Jünger, *Sämtliche Werke, Bd. 3,* SS. 428f. und SS. 442f.

しかしながら他方で、ナチズムの中に、そしてその台頭に象徴される時流の中に、何か不気味で不穏な要素が孕まれてもいることについて、ユンガーに全く予感がなかったわけではない。本論文と同じ 1929 年に刊行されたエッセイ『冒険心』は、ナショナリスト・イデオロギーの思考実験の書であると同時に、全体主義前夜の世相についての、イデオロギー的に加工される以前の審美的知覚を、シュルレアリスト的な文体によって表現した文学作品でもある。そこには、没落するヨーロッパへの弔辞とその中からなおも生き残る ―― ヨーロッパならざる ――「ドイツ」への期待とがナショナリスト的口吻をもって語られる一方で、著者が見た夢や幻想の報告という形式を取りつつ、ヨーロッパ没落の後に到来する迫害と拷問と殺戮の時代の予感が戦慄とともに示される。イデオロギー的急進性と時代の不安の芸術家的直観と

のこのような二面性は、興味深いことにニーキッシュの『ヒトラー』にも顕著に見て取れる。ただしそこで後者の面を担っているのは、ニーキッシュ自身でなく、このパンフレットに挿絵を提供した A. P. ヴェーバーである。彼の手になる 6 枚の線描画は、言わば集団自決の政治としてのナチズムの —— 1932 年の時点ではいまだ隠された —— 本質を恐ろしいほどリアルに描き出しており、その点で、ボルシェビキ的、親露的立場からヒトラーをヴェルサイユ体制とローマ＝カトリック的西洋とへの「投降者」として軽視するニーキッシュの、上に引用したようなイデオロギー的評価と好対照を成している。

（7） Das Schreiben von Hitlers Privatsekretär Rudolf Heß an Ernst Jünger am 10. 10. 1929, in : *Hitler. Reden, Schriften, Anordnungen. Februar 1925 bis Januar 1933,* Bd. 6, bearbeitet von Katja Klee, Christian Hartmann und Klaus A. Lankheit, München 2003, SS. 326f.

（8） Joseph Goebbels, Rund um die Rotationsmaschine, *Der Angriff,* 3. Jg., Nr. 47 vom 27. Okt. 1929, S. 5, in : Berggötz, *op. cit.* S. 860.

（9） ゲッベルスは同時期の日記（1929 年 10 月 7 日付）に、恐らくは『攻撃』紙所載の上述の論文に関連して、次のように記している。「昨日早く、ワイマールへ。途次、論文を書く。その後、ユンガー『冒険心』を読む。これは文学にすぎない。このユンガーについては残念だ。彼の『鋼鉄の嵐の中で』を、私は今もう一度読んだ。こちらは本当に偉大で英雄的だ。血気盛んな体験が背後にあるからだ。今日、彼は生から離れて殻に閉じ籠ってしまい、彼の書くものはそれゆえインク、文学となる。」*Die Tagebücher von Joseph Goebbels,* Teil 1 : Aufzeichnungen 1923–1941, Band 1/ Ⅲ, Hrsg. von Elke Froehlich, K. G. Saur, 2004, S. 344.

（10） これについては次稿で述べる予定である。

（11） Ernst Jünger, Reinheit der Mittel, *Widerstand. Zeitschrift für nationalrevolutionäre Politik,* Okt. 1929, S. 295–297, und ders., Schlusswort zu einem Aufsatz, *ibid.,* Jan. 1930, S. 8–13.

（12） Vgl., Berggötz, *op. cit.* S. 860.

「ナショナリズム」とナショナリズム[13]

エルンスト・ユンガー

小誌読者のかなり多くは、エルンスト・ユンガーの名前を一度も聞

いたことがないであろう。彼は、時限爆弾によるテロ事件と「ラントフォルク」運動の登場と以来、新聞紙面を賑わすあの「青年ナショナリズム」の、誰もが認める精神的指導者である。フーゲンベルク、ヒトラー、共産主義者をさえ反動的なプチブルと見下す、このグループの思想世界についてはなおさらのこと、たいていの人がほとんど何も知らない。小誌がこの思想にとっての最悪の敵であることを、小誌が請け合う必要はない。しかし同様に、TB〔『日記』誌〕の読者がこの思想について一度本当のところを聞くことを、小誌がなぜ欠かせないことと考えたかについても、あらためて説明する必要はない。小誌はユンガーにその思想について自ら述べることを求め、彼はこの求めに従った。以下において彼が詳述するところは、この作家の非凡な文学的才能をあらためて証言している。しかしその筆致が輝きを放てば放つほど、それだけいっそうユンガー流の綱領は政治に対して衝撃的な作用を及ぼす。このような世界像の出現との対決は不可避である。小誌は次号においてそれを掲載する。(14)

Ⅰ.

ここ数箇月来の出来事と関連づけて私と私の友人たちとの立場を手短に要約せよという要請を、私は貴誌から受けた。私があえて貴誌の要請に応じることを決めたのは、ひょっとしたら、ひとえに貴誌と私との間に存在する対立の大きさゆえと言えるかもしれない。それゆえ、どのみち私に対するあれこれの攻撃や非難が避けがたいと予想される以上、分かり切った留保などは全て省略して直ちに本題に入ろうと思う。

以下の論述において私にとり重要であることは、ナショナリズムの概念、あるいは ―― このような関連でよく言われる ―― 新ナショナリズムの概念に対してここで何とかして共鳴してもらうことなどでは断じてない。むしろ私は、この概念とその基礎にある諸条件との本質を簡潔に示すことが、従来まさに漠然とした一般的な仕方でナショナリズムに対して向けら

れてきた攻撃をある程度矯正することにあるいは役立つかもしれない、と願っている。言い換えれば、ナショナリズムはそのような攻撃を避けることを全く望んでいない。むしろその逆に、自らが責任を負う**まさにその場で**攻撃を受けることを望んでいるのである。というのも、混沌とし、真の教養を欠くこの時代において、ナショナリズムをめぐる事情は、誰もが全く多種多様な試みの安上がりな看板として好んで利用する社会主義をめぐる事情と似ているからである。しかしそう持て囃される割に、今日、本物の社会主義に、つまりあの抗しがたい心の温かみに出会う幸運は、たとえば ―― 貧困の厳格な誓いが地上にいっそう高次の国を実現するために戦う人間の第一の資格とされた ―― 修道会の全盛期におけるよりも、はるかに稀であるように思われる。

今述べたように、ナショナリズムにとっても事情は同様である。ナショナリズムとは、中心的な価値として感じ取られ、認識されたネーションのために、手にしうるすべての力、すべての手段を投じて献身する、純粋で無条件的な意志である。私は、ただちに政治状況の論術へと向かうために、この価値に関する論理的、倫理的な討議の現況を論術の周知の前提としておく。しかしながら、ナショナリズムがそのような諸々の論議を避ける必要はない、ということだけは強調しておきたい。歴史と精神史の重要な諸潮流はナショナリズムへと流入する。それは、ナショナリズムが戦争において最も近代的な技術の手段、意識の最新の鋼鉄製武器をさえも利用する用意を示すがゆえである。同様にナショナリズムは、愛国主義の慣用表現の古臭い定式化によって自己を表現することに価値を置かない。今日一般に慣行となっていることは、合目的性と快適というような根拠に基づいて、つまり中欧観光局のイデオロギーとでも言うべきものに基づいてナショナリズムに向けられる攻撃から、それらよりもいっそう深いナショナリズムの根源に訴えることによって、ナショナリズムを救い出そうとすること、これである。「非合理的なもの」という今日好んで用いられる言葉によって意図されているものがそれである。私は、強い吸引力を持つこの源泉を私自身の生の中にも見出しうると思うものの、そのような方法は効果的で

ないと考える。非合理的なものへの訴えは**どんな**現象にも開かれている。すなわち、どんな石や原子も解明されることがないのと同様に、自由主義も、市民層や西洋文明や史的唯物論も、「解明」されえない。ある現象に住まうデーモンは、生のあらゆる次元と位階において姿を現わすことができる。神々と人間との闘争は、わずかの書割だけが混沌を隠す舞台において燃え上がる。そして精神が求めるもの、それは肉体の武器をも出動させることになろう。言い換えるならば、本当に自己の理念に没頭する者は、路上で爆音が鳴り始めても、ネズミの巣穴に逃げ込んだりはしないのである。

ナショナリズムは、どんな種類の自由主義とも異なって、自らが精神的武器による闘争だけに制限されている、とは思っていない。ナショナリズムは自然的共同体に依拠し、けっして精神的共同体に依拠するわけではないので、そこで知性が演じるのは機能としての役割だけであり、それの実質の役割ではない。知性は奉仕しなければならず、無制限に力を発揮する必要がないという点に、ここでの知性の限界がある。しかしながらここには、知性を最も危険なものにする要因も存在するのである。

Ⅱ.

このような粗描から分かることは、ナショナリズムが、例えばマルクス主義やデカルトの根本命題に従う他の種類の精神的共同体などのようには、イデオロギーを必要としない、ということである。生はその都度事情に応じて動機づけられるのであり、生にとっては存在の華麗な展開自体の方がこの展開を動機づける仕方よりもいっそう重要なのである。さてナショナリズムはそもそも何を欲するのか。ナショナリズムが君主主義や保守主義や市民的反動やヴィルヘルム時代の愛国主義とはいささかの関わりも持たないということについて、ここで詳論することはできない。これらは、左右の日刊紙で言われるところの「ナショナリズム」にすぎない。朝食に三人のユダヤ人を平らげることもまた、なんらナショナリストの主特徴であ

るわけでない。つまり反ユダヤ主義はナショナリストにとってまったく本質的な問題設定ではないのである。定式化なしで済ませない人々のためには、こう述べるのがよかろう。すなわち、ナショナリズムは、**政治的な**現象であるかぎり、すべてのドイツ人の、国民的で、社会的で、軍事的で、権威的に編成された国家を追求する、と。

これらはもちろん、生自身がその意味を付与しなければならない言葉である。私が確信するところでは、ナショナリズムは十分なエネルギーを掌中にしているので、ドグマなしでもやっていくことができるし、他方ではどんなドグマをも利用することができる。もっぱらアナロジーの意味においてここで想起されるものは、〔フランスの〕共和国と第一帝政との軍隊の旗下における一般的人権の普及であり、ついでイタリアにおける国民的意志と近代西洋文明との婚姻であり、さらにはロシアで生じつつあるような、国民的意志と国際的マルクス主義との結合の顕在化である。ナショナリズムの側からは事態がこのように見えるが、別の側から見てみるならば、諸国民の中にもはや疑いようもなく豊かに貯蔵され、もっぱら色あせた思考だけがそれを否認しようと無駄骨を折っている、あの強力なエネルギー源を、非常に多種多様な理念が我が物にしようとしているように見える。敢えて公言すれば、力の途方もない集中でもある、力のこのような浸透の中に、私は、現代政治の達人が見出さなければならない賢者の石を見る。

ドイツにおいていついかなる仕方で解決が実現するかは、もちろん見通せない。ドイツの力は内政上の諸制約によってほぼ完全に麻痺しているからである。ひょっとしたらまずはヴィルヘルム主義から相続したルサンチマン ―― これこそが今日なおあらゆるイデオロギーの最大の源泉を成している！ ―― の最後の残滓が燃やし尽くされなければならないのかもしれず、あるいは、例えば黒白赤と黒赤金との対立のような伝統的対立をもはや全く問題にしなくなった勢力が予め成長していなければならないのかもしれない。しかし機会はすでに早くから見られた。例えば、もしノスケが社会民主主義的な小市民を超える存在であったなら、どうであっただろうか。あるいは彼の将軍たちの中にいかなる伝統によっても阻害されない

エネルギーを持った、スケールの大きい政治家がいたなら、どうであっただろうか。もし共産主義が西洋資本主義に対する闘争宣言と戦闘的な青年層に対する訴えとを同時に行うことによって政治的指導権を掌握していたなら、どうであっただろうか。たしかにさまざまの端緒が見られた。しかしながらこれら指導者の全てはなお、悪しき政治家たる将軍、悪しき独裁者たる政治家によって彩られた一時代の遺産にほかならない。こうしてこれまでのところ単に賢者の石がまだ見出されていないばかりでなく、「石を使える賢者が欠けて」もいるのである。

Ⅲ.

生成しつつある者にとっては、形式よりも混沌の方が好都合である。ドイツとオーストリアにおいてあらゆる政府と議会が同時にへたばっている瞬間があった、という事実を考慮すれば、それが明白となる。挙句の果てが議会制民主主義であったという事実ほど、我々が体験したものが崩壊にすぎず、革命でなかったことをはっきりと示す証拠はない。我々の祖父世代は自分たちの酸っぱくなってしまった理想の実現にかかずらうことも許されたが、しかしこの制服はあまりにも安手で、あまりにも古臭い48年型の既製服であったから、長持ちすることができなかった。**青年の間には、革命が取り戻されなければならない、という見解が存在する。**

議会制民主主義国では、多数派が入れ替わる。経験的な性格は変化するが、根本的な性格は持続する。最高権力が**ひとりの人間**に委ねられる瞬間から、**人員**が入れ替わる。推論を若干省略して言えば、**一国内のあらゆる革命的勢力が、たとえ互いの間にどれほど大きな対立を抱えていても、互いに目に見えない同盟者である**という事実は、このことと関連する。それらの中のいずれが勝利するにせよ、その勝利は、どれほど危険な大気の中でも行為が息を継ぐことを可能にする媒体を生み出す。**秩序が共通の敵なのであり**、まず重要なことは、行動が次々と展開でき、混沌という蓄えから自らのエネルギーを引き出せるようにするために、総じて法律の真空空

間を突破することである。したがって、今日例えばナチ党員と共産党員との間に見られるような敵対関係は、私には単に戦術的な理由からしても不可解に映る。この敵対関係は、これら二つの運動の中に、体制に関心を持つ市民的な要素が、彼ら自身が思っている以上になお多く潜んでいる、ということの証拠である。もしそうであるなら、一方が目指すものは、その今日的な形式においては西洋文明の意味における国民＝市民的な国家であり、他方が目指すものは、シュレーバーガルテン様式の小市民的合理主義的秩序のもっとも極端で最も退屈な形式、一種の恒久的なパン配給券宣言である。今日、共産主義に関して本当に重要な唯一の問題設定は、プロレタリアの概念を純粋に経済的なものから**英雄的な**ものへと転ずることがドイツにおいても成功するかどうか、というものである。

しかしながら闘争への真の意志、本物の憎悪は、敵を破壊しうるものなら全てを欲する。**破壊は、目下の状況ではナショナリズムにとって唯一相応しいと思われる手段である。**ナショナリズムの任務の第一段階はアナーキスティックな性質のものであり、それを認識した者は、道程のこの第一段階では破壊を可能にするもの全てを歓迎する。外政上の圧迫をまだ我慢できるものに見せかける措置と内政上の緊張を緩和できるかもしれない措置とを講ずること、選挙に参加すること、会議や投票に影響を及ぼすこと、いわゆる国民評決と取り組むこと、これらは我々の任務でない。政治的、社会的道徳の一般的な堕落や、堕胎、ストライキ、ロックアウト、警察と軍隊との人員削減などに対して、長広舌をふるって抗議することは、我々の任務でない。**秩序を保ちながら遂行されうるような革命が存在するという見方は、俗物たちに任せておこう。**原始的なものはそもそも道徳的なものと何の関わりがあるのか。戦争という地獄の淵で長い時を隔てて初めて我々の目に見えるようになった原始的なものに、我々は接近しつつある。吹き出る銃火が我々の進路を切り拓かなかったようなところ、火炎放射器が無を通じて大掃除をしなかったようなところに、我々は断じて立たないだろう。全体を否認する者が、部分から果実を取り出すことはできない。**我々は市民の真正の、本物の、仮借なき敵であるので、市民の死滅は我々**

の喜びである。我々は断じて市民でなく、戦争と内戦の息子である。これら全て、空虚の中を回転する回り灯籠のごときこの芝居が一掃されるとき、そのとき初めて、自然、原始的なもの、真の野生、原言語、血と精子とによる本物の生殖の能力に関して、まだ我々の中に秘められているものが成長しうるようになろう。そのとき初めて新しい形式の可能性が与えられよう。

Ⅳ.

これまでの議論から、上述したような態度が組織によって代表されるものではない、ということがあるいは明らかとなったかもしれない。実際、我々の時代の革命的、国民革命的な諸組織は、市民的世界の自己解体過程の一つを示すものにほかならない。このことは、それらの政治的不毛性とそれらを絶えまなく襲う分裂傾向とを見るだけでも、推察できる。それらは、それを知りもせず、望みもしないものの、つまるところ、本性上、体制の構成部分なのである。

実際のところナショナリズムという名称は、最初はごく狭い範囲に属する男たちによって、個別には非常に多様な彼らの活動だけを指し示すものとして用いられた。この語が当時まったく適切であったのは、市民層の半分がそれを常にひどい侮辱語として利用し、もう半分がこの語と自己との間に一線を画そうと精一杯努めたからである。残念なことにその後このような事情が変化したのは、とりわけ、青年層の従来とは異なる特定の関心が見紛いようもないほど明白になってきたからである。今日ではドイツ国権派に至るまでのあらゆる国民的組織において、「ナショナリスト」を自称する主張が唱えられている。イデオロギーの面で狭義のナショナリズムと明白に関わりを有したのは、青年運動の幾つかの集団、とりわけシル義勇軍を除けば、これまでのところホルシュタインの**ラントフォルク**があるだけである。この運動は、我々の非常に驚いたことに、近ごろ高い注目を集めることとなった。というのも、我々はナショナリズムへの注目が、さしあたりむしろ都市部での人気をきっかけとして高まるだろう、と見込ん

でいたからである。それはともかくとして、本物のナショナリストについて語る場合には、常に、考えうるどんな組織をも目的でなく手段として見なす男たちだけが問題となりうる。そうあるべきなのは、現在の局面ではナショナリズムが、―― 非常に多種多様な団体を、ここかしこで、しかも司令部からの命令なしに、無力化する ―― 目に見えぬ神経系でしかありえないからである。イメージとしては鳥の飛翔のそれが役立つかもしれない。厳格な訓練の成果があるように見えるにもかかわらず、その方向転換は本能に基づくのである。

目下の状況をテストする格好の機会を与えたのが、近ごろ連続して起こった周知のテロ事件である。現代の物量戦に最もよく精通した者の一人たる私には、国有建造物の前で打ち上げられたこのような夜の花火が控えめに言っても平凡なものに映る、ということは信じてもらえよう。そうであるだけにいっそう高まるのが兆候への関心である。すなわち、目に見えぬ人物たちによるこのような音響信号がどのような仕方で受け止められるか、ということへの関心がそれである。

もっともであるのは、警察、内務省の態度である。もっともであるのは、フォス新聞である。同紙は、その他の記事におけるいつもながらの行き届いた人道的な言い回しと好対照を示しつつ、ほんの少しでも怪しい者なら誰でも直ちに監獄へ入れさせようとした。もっともなのは、つまるところ静粛こそが今なお市民の第一の義務であると考えるがゆえに、「犯罪者が今ついに捕まる」という歓呼の声を上げた地方紙の態度である。しかしながら共産主義者がその機関紙で岡っ引きに向かって悲鳴を上げるのを聞くと、やはり奇異の感がする。それが意味するところは、逆説的に言えば、そこにおけるナショナリストの存在が私の予想よりもはるかに少ない、ということである。しかしヒトラー氏はおまけに〔犯人逮捕に〕懸賞金までつけた。

こうして再び証明されたことは、いかに連中が根本的には実際みなまったく一致、一致、一致しているか、ということである。ご立派なことだ。諸君はやはりみな市民であればよい。諸君がどのように回転し、どのよう

に向きを変えようとも、また諸君が使い古しの陳腐なメダルをどれだけ磨き、表面にどんな文字を彫ろうとも、根本的にはやはり裏面の同じ顔が透けて見える。私はこれ以上その顔に世辞の贅言を費やすつもりはない。

しかし私は、実際どこかに、諸君の周囲の至るところに分散しつつ、―― 空気が必要なら吹き飛ばしてしまわなければならない ―― 甲殻の汚い屋根の下に、諸君よりも誇り高く大胆で高貴な青年たちが潜んでいることを知っている。彼らは明日と明後日の貴族であり、血と精神とはひとえに彼らに恩義を感じている。彼らは、卑劣さとルーチンワークと退廃という毒ガスによって地面に打ちのめされ、孤独に死ぬ、今日の無名兵士である。

連中が学ばなければならないことは、今日のような時代には旗なしでも行進することができるということ、これである。

注

(13) Ernst Jünger, "Nationalismus" und Nationalismus, *Das Tagebuch,* Berlin, 10 J., Nr. 38, 21. Sept. 1929, SS. 1552–1558.

(14) この文章は、『日記』誌の編集部によるまえがきである。編集人のシュヴァルツシルトは、ここに予告されているように、同誌の翌号（1929 年 9 月 28 日付）に「退屈からの英雄主義」と題する批判文を載せている。Vgl., Helmuth Kiesel, *Ernst Jünger. Die Biographie,* Siedler, 2007, S. 298f.